

李 澤熊『現代日本語における意図性副詞の意味研究——認知意味論の観点から』ひつじ書房

本書は、名古屋大学大学院国際言語文化研究科に提出した博士論文がもとになっており、2022年度の科学研究費の助成を受けて出版されたものである。世に出るまでに実に20年の歳月を要したが、こういう形で出版できたことは素直に嬉しい。

タイトルにもあるように、本書は日本語の意味を分析したものである。ことばの意味というのは、統語論や音韻論などの研究分野のように視覚や聴覚では捉えられず、(極端な言い方をすれば)日本語母語話者の心の中でしか把握できない、得体の知れないものであると言える。そういう意味では、日本語の意味研究は日本語非母語話者である私にとって無謀な挑戦に見えるかもしれない。にもかかわらず、(細々とではあるが)研究を続けている理由は非母語話者なりに何らかの貢献ができるのではないかと思っているからである。

日本語は、日本人にとってみれば無意識のうちに身につけた母語であり、空気のような存在である。従って、日常の意識ではそもそも問題にならず、当たり前のことをわざわざ問題にすることも普通はしないと考えられる。それ故、日本語母語話者であっても様々な注目すべき言語現象(日本語の重要な特徴)に気づかないこともよくある。実は、母語話者よりむしろ非母語話者のほうがそのような言語現象によく気づいたりする場合もある。というのは、非母語話者の場合、母語話者に比べて日本語を客観的な立場・視点で観察しやすい側面があるからである。具体例の一つ見てみよう。

- (1) 先日、恋人の花子と(○といっしょに)映画を観ました。
- (2) 先日、恋人の花子と(?といっしょに)結婚しました。

例えば、外国人(非母語話者)に「人と」と「人といっしょに」の違いについて質問されると答えられず困ってしまう、つまり、この2語の使い方が正しいかどうかという判断はできるが、なぜそうなのかという理由の説明がすぐにはできない人が、(専門家は別として)意外と多いのではないだろうか。外国人の場合は、日本語学習の段階で意識的に習得するため、母語話者よりよく知っていたりすることもある。一般的に「人と」は「必ず相手が必要な行為をする」ことを表す場合に用いられるのに対して、「人といっしょに」は「1人でできる行為をたまたま2人以上でする」ことを表す場合に用いられる。このような違いに気づくためには、日本語という母語を自分自身から突き放して捉えてみる、つまり、客観的な立場から日本語を観察することが非常に有効であると考えられる。そうすることによって、普段気づきにくい日本語の様々な現象に気づくようになる。これから日本語の専門家を目指す人には、こういったことを念頭において日頃の日本語に接してほしいものである。

さて、本書は現代日本語の意図性に関する副詞的成分の意味用法について、言語は認知主体である人間の認知能力を反映したものであると考える認知言語学(認知意味論)の観点から、分析・記述したものである。以下、本書の概要を簡略に述べる。

第1章では、研究の目的と対象、本書の立場について述べた。

第2章では、本書の基盤となる理論的背景について概観した。具体的には、まず、意味分析の基本的な考え方と方法について、注目すべき記述がなされている先行研究を取り上げ、本書の立場を確認した。また、類義語と多義語の基本的な性質および定義付けと、本書の議論の土台となる基本的概念・理論について、先行研究を踏まえて概観した。

第3章では、副詞に関する先行研究を整理・検討し、副詞の定義・分類を行った。考察にあたっては、プロトタイプ(protoype)に基づくカテゴリー化(categorization)という理論に基づき、副詞というカテゴリーの成員は、その成員らしさという点では一様ではなく、中にはプロトタイプに近いものもあれば、それとはかけ離れた周辺的なものもあり、成員間で段階性が見られるということを明らかにした。

第4章では、本書で考察する語の副詞における位置付けを検討した結果、従来例外扱いされていた意図性に関わる副詞的成分を「情態副詞」と「陳述副詞」の中に位置付けられることを明らかにした。

第5章では、本書で考察する語のより詳細な分析・記述を行う前提として、階層構造（下位分類）を提示した。階層構造の検討を通して、本書の考察対象である意図性に関わる副詞的成分は、家族的類似性（family resemblance）の観点から見た場合、家族的類似性の構造のうち、鎖状のカテゴリーに該当することを明らかにした。

第6章では、第5章で階層構造を提示した際に、各グループの境界に位置付けられていると考えられる5語（思わず、つい、ふと（ふっと）、何気なく、さり気なく）を取り上げ、各語の個別の意味と相互の意味の類似点・相違点を明らかにすることによって、各グループが連続的につながっていることを検証した。第7章から第10章にかけては、第5章で提示した下位分類に基づき、各語の意味について詳細に記述・分析した。

第7章では、AIグループに属する5語（つい、うっかり(と)、うかうか(と)、うかつに、うかつにも）を取り上げ、各語の個別の意味と相互の意味の類似点・相違点を明らかにした。なお、「うっかり」と「うかつに」の分析については、認知意味論の観点からの考察が有効であると考え、2語の意味の類似点・相違点を明らかにする前提として、ベース（base）とプロファイル（profile）の概念を援用した。

第8章では、AIIグループとAII'グループに属する6語（思わず、無意識に、我知らず（に）、知らず知らず（に）、いつの間にか、いつしか）を取り上げ、各語の個別の意味と相互の意味の類似点・相違点について考察した。

第9章では、AIIIグループに属する5語（何となく、何だか、何気なく、それとなく(II)、どことなく）を取り上げ、各語の個別の意味と相互の意味の類似点・相違点を明らかにした。なお、「何となく」「それとなく(II)」「どことなく」の分析については、認知意味論の観点からの考察が有効であると考え、3語の意味の類似点・相違点を明らかにする前提として、フレーム（frame）の概念を援用した。

第10章では、BIグループとBIIグループに属する6語（さり気なく、それとなく(I)、敢えて、強いて、無理に、無理矢理(に)）を取り上げ、各語の個別の意味と相互の意味の類似点・相違点を明らかにした。

第11章では、第5章から第10章までの考察結果を踏まえて、考察対象とする語の副詞における位置付けの検討を行った。具体的には、プロトタイプに基づくカテゴリー化という考え方にに基づき、考察対象とする語が「情態副詞」と「陳述副詞」の両方の性質を持ちつつ、語によってその一方の性質をより強く持つという連続的な性質について検証した。

第12章では、本書のまとめを行い、本書の意義と今後の課題について述べた。